

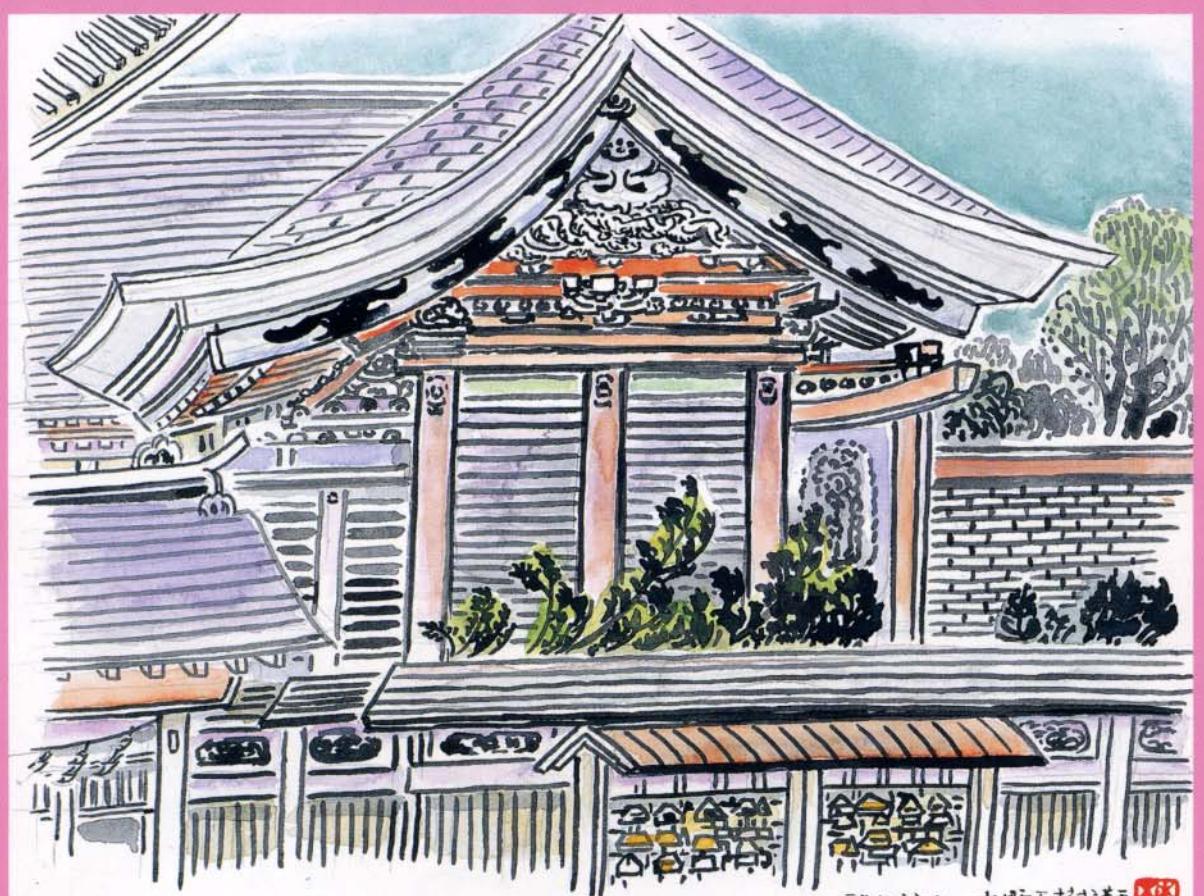
社乃柱

秩父神社社報

柞乃杜 (ははそのもり)

第 19 号

平成 11 年 7 月 20 日
(川瀬祭)



秩父神社 大野百才謹筆

川瀬祭
夏うれし
梅雨明けの空
輝きて
子等が祭に
競ひ立つら

国旗と国歌のこと

生きものとしてのヒトが人間になること、それは生まれた社会の大人になることです。大人になることは、人生の生き甲斐を求めて愛する家族や社会を支える一員となること。ひとりで勝手に好きなことができることではないのです。

近ごろヒトは自分の思うようにならないと、とかく家族や世間のせいにして「社会が悪い、歴史が悪い」とばかり、過去のしがらみを捨てて何でも気ままにすることが当たり前の権利だと、まるで人間になろうとしない者が何と多いことか。

「日の丸」の旗と「君が代」の歌とは、共にこの国に生まれた人間にとつては確かに重い過去のしがらみであるはず。けれども、そうであればこそ、自分たちにとつて愛憎と悲喜こもごもの手応え確かな歴史文化のシンボルでもあるはずなのです。

ヒトは人間として、過去のしがらみを背負い、自分の身に引き受けてこそ大地に足を付けた確かな大人への道を歩むことになるのです。過去を背負い未来を見据えて、現在を生きることこそ時代の人間の責任だとすれば、良きにつけ悪しきにつけ熱い想いの籠もる国旗と国歌こそ、それにふさわしい時代の象徴ではないでしょうか。

解説 秩父神社(18)

彩の国 名工合々長

坂本才一郎

◆秩父神社社殿

災害復旧工事覚書

(7)

秩父神社藏天正二十年の

棟札について

神社には下記の棟札と、秩父大宮妙見宮縁起(埼玉叢書卷三参照)がある。この縁起から棟札と関係ある部分を抜粋する。永禄十二年(一五六九)の七月、甲斐の武田の軍兵乱入し、御本殿はじめ社地の建物悉く焼捨て、神領や社頭の仏堂のたつ地まで占領、破壊してしまった。

天正十九年十一月家康公は氏邦の朱印七石を先例とし、なお五拾石を増寄し給いて合せて五拾七石の御朱印をくだされ、翌二十年七月より造営

(長さ 三尺五寸八分)

(幅 六寸)

聖衆大中天 大且那東閥國主正二位源朝臣家康

仁皇百十世天正帝朝

造宮發起大日那都筑右近衛門尉古長

竣立願主 河田備前守

町太郎新井三郎左衛門尉

并 河田主膳首

書きあげている。

私は今まで神社の

棟札ぐらいと軽視して

いたが、天正は秩父に

とって重要な年代であ

る。ルート一四〇号の

開通により甲斐の戦国

最強の武将と言われた

武田信玄公の造営又は

信玄入道は軍旅には通じた方であるが、神罰の恐ろしさは知らない様である。

天正七年(一五七九)の正月、鉢形城主氏邦は御仮殿をたて朱印七石を寄附したが、天正十八年には鉢形城及び本家の小田原城とも落城し、氏邦公の門葉悉く没落した。徳川家康公は同年八月相模国を御進発八王子より多摩、入間、高麗、比企郡の越生、慈光、小川を巡らせられて当社の御参詣あらせられ、妙見軍神の靈祠を聞召され、御武運長久を祈り給いける。是より当郡を西に廻らせられ、鉢形城を上覧なされて鴻巣の宮地の御旅館に暫く御滞留ありて江戸城に入らせられたのである。

天正十二年武田の軍兵乱入、秩父地方の社寺焼討は古くからいわれているが、永禄十二年 北條氏邦、武田の秩父攻めに武甲山に必勝祈願を

関係した遺構と接する機会が多くなった。

塙山市の熊野神社本殿、山梨市の窪八幡神社本殿及び若宮、末社の社殿。韋崎市の武田八幡神社本殿。一宮町の浅間神社攝社、山宮神社本殿等で、いずれも中央の高度な技術が甲斐で開花した名建築である。残念ながら秩父盆地では見られない建物である。之等から信玄公は武勇にすぐれているばかりでなく、高い教養を身につけた武将と思われる。

永禄十二年武田の軍兵乱入、秩父地方の社寺焼討は古くからいわれているが、永禄十二年 北條氏邦、武田の秩父攻めに武甲山に必勝祈願を

同 七月 甲州勢、秩父侵入の際、

高名、手柄をたてた阿佐美伊勢守、薄住、多比羅

將監、同、出浦左馬守に

感状を送っている。

之等の古文書も武田の軍兵乱入を物語るものであるが、戦場できたえた武田の軍兵は氣も荒く乱暴な点もあったかもしれないが、天正元年(一五七三)信玄殿

同十年光秀、信長を殺害、同十八年秀吉

関東平定、慶長三年(一五九八)秀吉歿

と変転したが、家康が天下人となつたこ

とが神社の復興に幸いしたと思われる。



奉造立武州秩父郡武光名大宮妙見大菩薩御社壇一字檜皮葺成就畢	材木奉行 黒崎隼人佑
一天国務關白右大臣	河田五郎左衛門尉
神主 蘭田刑部左衛門尉秀満	甲州住 水上五郎左衛門尉
一國務關白右大臣	横屋勢右衛門尉
大工 甲州住 渡辺小次郎	市河三郎右衛門尉
良知藤一郎	雜事奉行
斎藤彦七郎	
迎陵頻伽声 同且那代官 成瀬吉衛門尉	

「町ぐるみ回遊型の祭礼博物館づくりを！」

—マチおこしの提言—

宮 司 薩 田 稔

マチおこしの概要

昨年の例大祭に際して刊行した前回の社報では「今マチが危ない一家郷社会の崩壊」という論説を掲載して、秩父のよき全国の地方中小都市がそれぞれ大切にしてきた家郷性ゆたかなマチ社会が、いわゆる米国流市場開放の圧力の下で住民同士の親密な商い文化を破壊されて、つぎつぎと消滅の危機にあることを指摘しておきました。

こうした事態をなんとか救って、地方住民が大都市に負けない豊かな生活社会を再構築しなければならない。我がふるさと秩父も、今は従来の他力本願による安易な産業誘致や観光開発を待つのではなく、住民自身が冷静に郷土の社会経済状況を見極めつつ、真に秩父ならではのマチおこしがどの方向にありうるかを自分たちで構想し実現する覚悟が必要だとおもいます。もう中央官庁のお役人や評論家のコンサルタントのご託宣を当てる時機ではなく、自分たちのマチは自分たちの構想で守り育てる自力の気概がなければ、とうてい次代の子供たちに我がマチを託す資格はないのです。

見極めるべき現状認識

さて、そこで現在の秩父が当面する社会経済的諸条件をどう見極めるか。私は、おおよそ次のように今考えます。



臣氏作 「秩父神社」

一 地政学的条件として、秩父は、首都圏という大都市社会の後背地に当たる典型的な中山間地帯として、その水源と文化的保養の貴重な環境資源を保有する地域である。

二 経済的条件として、その一次産業たる農林業には多くを期待できず、むしろ観光や保養の資源ないし自然環境保全の用途に経済的価値をおくことにその活路を見出だすべきであり、またセメント・石灰鉱業は既に地元産業としての使命を終えたものと考える。

三 かつて盛んな養蚕に基づく生糸・織物業はほとんど消滅し地場産業としての復興は期待できないが、小規模の伝統工芸としての創造的な存続は可能とおもう。

四 情報機器関連の精密機械工業も小規模下請程度で多くを期待できない。

総じて以上のようないわばモノ造りを主体とする従来型産業都市の発想は、秩父地域の創造的将来計画には全くなじまないと、この際はつきり見極めるべきであります。

「風土工学」という発想

では、どうしたら秩父ならではのマチおこしが可能なのか。どのように考えたら、秩父に住む住民たちが挙ってマチづくりに参加できるような希望に満ちた構想が描けるのか。それには、まず従来の産業開発一点張りの経済構想を捨てて、なによりも住民たちが心身ともに健康で住みやすく自他ともに魅力的な生活社会づくりを目指して、いま秩父に残されている地政学的諸条件を最大限に活用することが必要です。そしてそのためには、いまや日本の土木工学で注目されつつある「風土工学」の発想が大切なのです。

たとえば、その開拓者のひとり竹林征三氏はおおよそ次のように語っています。

「土木はこれまで最適化原理が至上の原理で、どのようなものの設計でも、共通仕様書、標準設計、マニュアルや手引きという形で実施してきた。ところ

が、地域の風土、文化を理解すればするほど、奥行きが深い設計ができるということがわかつてきた。特に、歴史的に、例えば、京都の町、鎌倉、宝塚、田園調布といった町はどうしてそのような風土になつたのか、と考えてみると、強烈で大きなコンセプトのもとに、その地の固有の風土文化形成を図つてきていることがわかる。吉野の桜などの名所にしても、いま私どもが素晴らしい風土文化といっているものは、ほとんど先人が意図してつくつてきていている。そのようなことと一番深く関わるものづくりの実学が土木なのだが、昨今の土木はこれまでそういう個性豊かな地域にしてみせようという心があまりなかつたのではないかと反省させられる。そもそも土木は、良好風土形成に資する事が基本的な目的ではなかつたのかということが、私の風土工学構築へのアプローチの考え方だ。」(佐々木綱他『景観十年風景百年風土千年』蒼洋社刊・参照)

祭礼という風土文化こそマチおこしの核

私は、かねて我らが秩父神社の神事祭礼を「風土祭祀」という発想でとらえてきました。武甲山と荒川とが秩父を代表する自然であり、その豊かな自然を風土化した祖先たちがその恵みを風土の神徳として敬愛し感謝してきた祭礼文化こそが、いまや我々住民に残されたかけがえのない個性的風土の生活基盤なのです。

前号の論説で指摘したように、秩父の旧市街が形成してきた親密な生活経済が郊外型のスーパー・マーケット群の侵食で危機に瀕していることを考えれば、これに対抗して強力な抵抗力を備えるには、こうした安手の大店舗の非文化性を逆手にとるしかないのであります。

そこで提案したいのは、夏祭と冬祭の各屋台町を中心にそれぞれ特色ある企画展示施設を配置して街ぐるみで回遊型のユニークな祭礼博物館を構築するのです。祭礼は総合文化ですから、国内や海外の展示資料や視聴覚資料は無数にあります。



彩の国大使 石井一

【表紙歌解説】

夏うれし 梅雨明けの空輝きて
子等が祭に競ひ立つころ

今回の表紙の歌は、秩父市上町にお住まいの柿堀欣一郎先生が、平成十年の夏祭りより八年ぶりに七月十九、二十日に戻りその折り詠まれた夏祭りの歌を掲載させていただきました。

鬱陶しい梅雨が明け、真夏の太陽のもとお囃しの音が、また元気な子供たちの声が響きわたり、若いちからが激しく陽のひかりよりも輝き競い立ち、町に繰り出す様がうかがえます。いよいよ夏本番太陽のそして子供たちの季節の到来です。

【表紙解説】

この度の表紙絵は埼玉県熊谷市にお住まいの画伯大野百樹先生の作品を掲載させていただきました。

大野先生は大正九年九月、秩父郡吉田町に生まれ、吉田小学校高等科卒業後、絵画(油絵)の道に進みました。二十歳の時、東京美術学校(現・芸大)の教

され、昭和四十九年熊谷市文化財保護審議委員兼文化財専門調査委員、五十八年熊谷市美術家協会会長、六十二年顧問。平成二年埼玉県文化功労賞(芸術)、四年地域文化功労者(芸術文化)文部大臣表彰、九年埼玉県文化財功労者表彰を受けられています。

この度の表紙絵には、熊谷・八木橋百貨店の発行する月刊誌「お茶の間ジャーナル」に、昭和六十一年から大野先生が連載している主に埼玉県内の風物を描く「四季点描」の中の作品、当秩父神社の東側社殿を描かれた作品を掲載させてい

神輿や山車ばかりか芸能や美術や競技や人形や仮面仮装や、多種多様な資料を各町内が得意な分野を蒐集し競つて展示を工夫する各分館を、観光客が巡って世界中の祭礼文化を楽しむという構想です。現存する商店街活性化の計画では、残念ながら個性的で観光に魅力ある全体構想を見出だすことができません。国内に唯一で秩父にこそふさわしい総合的でしかも回遊型の祭礼博物館こそが、町ぐるみで観光客を満足させる商店街に生まれ変わら原動力となるでしょう。

神饌田親子田植え報告

秩父神社の神饌田御田植え神事は、社報第12号で報告されているように、大切な当社恒例行事の一つに挙げられます。

本年は六月十三日(日)に梅雨とは思えぬ晴天のもと、秩父郡横瀬町に在る秩父神社神饌田において、御田植祭典に引き続き田植えの所作が行なわれました。本年より田植えに従事していただの方の多くが新たに代わり、加えてこれから時代を担う子供たちの参加も募り行なわれました。おつかなびっくりはじめて田んぼに入る子供たちは足に感じる水と土の感触に大きな歓声をあげていました。「人差し指、中指、親指でつまむよう苗の根を土の中へ潜らせるように植えてください」と田植え名人の声がか



かります。子供たちは苗束から苗を分けては、おぼつかない手つきではじました田植えもしばらくすると、「さすが子供は呑み込みが早い」と名人のお墨付きができるほど上達していました。一方、お父さんは慣れた手つきで、ひょいひょいときれいに苗を植えてゆきます。それはあたかも、夏の強い日差しのとも、麦藁帽子をかぶって虫を追いかける野山を駆け回った少年の頃を思ひ出すかのように楽ししそうに行なっているではありませんか。

なかなか親子の接する機会の少ない現代にあって、会話を以上に体験は心に共有するものが得られる感じます。来年も、「組でも多くの方々の参加をお待ちしております。

新人紹介



実習生 柳田耕史

昭和五十二年二月
二十三日生まれ
栃木県真岡市出身
國學院大學文学部
神道学科卒業
趣味 ボーリング・ギター



巫女見習 飯田善子

昭和五十二年九月
四日生まれ
群馬市中村町出身
群馬女子短期大学
生活学科卒業
趣味 音楽鑑賞

初めまして。今春大学を卒業して

四月一日から秩父神社でご奉仕させて頂いております柳田です。

私が初めて秩父に来たのは、大学の三年の夏。大学の実習に於いて三峯神社でお世話になり、その際秩父神社に正式参拝し、宮司さんのお話を聞かせて頂きました。その時はまさか、秩父神社にご奉仕させて頂くことになろうとは夢にも思いませんでした。

私も大前神社という社家の生まれであり、長い間秩父神社にお世話になることはできませんが、この土地このお宮でしか経験できないこと、特に日本三大曳山祭りの一つ「秩父夜祭り」の歴史や祭に至るまでの人々の関わりや準備等も学んでみたいと思っていました。また、私の生まれ育った真岡市の人口が秩父市とほぼ同数ということから、町としての秩父ということについても学んでみたいと思います。

最後に、未熟な私ですが日々精進して神明奉仕に努めますので、どうぞよろしくお願いいたします。

恥かしいお話ですが、私は秩父に生まれ育ちながら神社の歴史や秩父の事などについて何一つ知りませんでした。ですが、今は当社はもとより秩父地方に古くから伝わる祭や伝統行事を皆様と共に守っていきたいと思っています。

まだ未熟者ではありますが各地からの参拝や御祈願など様々な思いで神社へ訪れた方々に親しみをもつていただけるような巫女として、諸先輩方のように品性に研ぎをかけ、教養を高め神明奉仕に努めてゆきたく思いますのでどうぞ宜しくお願ひいたします。

